

学校におけるアルコール関連問題予防教育ツールの検討

－テキストマイニングによる自由記述の分析から－

*樋口 広 思・**渋谷 浩 太

要 旨

近年、未成年者のアルコール関連問題の予防教育は大きな課題となっている。この課題の取り組みにあたっては、未成年者の多く所属する学校での取り組みが、アルコール関連問題の予防に果たす役割は大きい。本研究では、東日本大震災の支援の経験から作成されたアルコール関連問題の予防教育ツールである「アル・コル・かるた」が学校においてどのような効果をもたらすかについて検討することを目的とした。「アル・コル・かるた」を実施し、自由記述の回答から、テキストマイニングによる質的分析を行った。結果として、アルコール関連問題予防教育は早期に行うことの重要性が示唆された。また、アルコール関連問題の学習内容は、依存症の怖さのみを伝えるのではなく、いかに飲酒行動と付き合うかを伝える必要があると考えられた。さらにアルコール関連問題が大学生にとって身近であることが推察され、支援の必要性が確認された。

Key words： アルコール関連問題、予防教育、テキストマイニング、アル・コル・かるた、東日本大震災

1. 問題と目的

2017年に施行されたアルコール健康障害対策推進基本計画の重点課題はいくつかあげられるが、その中の一つに、未成年者の飲酒予防、また飲酒に伴うリスクに関する知識の普及がある（厚生労働省，2021）。この課題の取り組みにあたっては、未成年者の多く所属する学校や地域自治体での取り組みがアルコール関連問題の予防に果たす役割は大きい。

2011年3月11日に発災した東日本大震災以後、被災地において様々な問題が生じたが、その中の大きな問題の一つとしてもアルコール関連問題があげられている。災害後の地域においてアルコール関連問題が生じる可能性については、阪神淡路大震災以降に注目されるようになったが（上野，1997）、筆者らが東日本大震災後の支援活動を行ってきた宮城県石巻市等の石巻圏域においても、アルコール関連問題の対応が一つの大きなテーマとなっている（石巻市，2014）。この支援の経験から、地域におけるアルコール関連問題予

防教育の重要性が見出された。そこで、東日本大震災の最大の被災地である石巻市を中心とした地域で支援を行っている一般社団法人震災こころのケアネットワークみやぎ からこころステーション (<http://karakorostation.jp>) は、公益社団法人日本精神神経科診療所協会「平成27年度田中健記念研究助成事業」の助成を受け、アルコール関連問題予防教育ツールとして「アル・コル・かるた」を開発した。

本ツールは、東日本大震災から10年が過ぎた現在も、予防教育ツールとして、また当事者や当事者の家族への心理教育ツールとして、地域における健康推進活動イベントや、復興公営住宅の集会所で開かれるサロンなどで使用されている他、からこころステーション内で行われているアルコール関連問題の当事者やその家族のグループプログラムにおいても活用されている（これらの取り組みについては、樋口・渋谷（2020）を参照）。

本ツールの独自性は、かるたという遊びは幅広い年齢層がルールを理解している点や、集団で行うことが

* 宮城教育大学 学校教育運営部会（臨床心理学）

** 震災こころのケア・ネットワークみやぎ

できるゲームである点、また気軽に導入できるといった点にある。それは、アルコール関連問題予防教育ツールとして導入することを考えた際に、アルコール関連問題の知識や問題意識を持ってもらうことも重要であるが、それ以前に、アルコール関連問題を学習すること自体への抵抗感をいかに軽減するツールであるかという観点に基づいている。その背景に、導入しようとする石巻圏の地域に限らず、日本全体において、飲酒に寛容な背景があることが大きい。飲酒行動自体が非常に身近であることから、アルコール関連問題を学ぶことによって自身の飲酒行動への内省を促すこととなり、時に自責的になったり、認知的な不協和を起こしたりする可能性もある。結果として学ぶこと自体に抵抗感を持たれる可能性があるため、予防教育ツールはいかに取り組みやすくするかが重要であろう。

渋谷(2016)は「アル・コル・かるた」を予防教育ツールとして、自治会や市民団体の関係者へ実施し、またアルコール関連問題の支援者である市町村保健師、社会福祉協議会や地域包括支援センターをはじめとした地域福祉に関わる職員、精神科医療関係者等に実施している。その効果について、支援者一非支援者にかかわらず、知識や問題意識の値の向上が確認され、アルコール関連問題への取り組みやすさに関する評点も上昇したという結果を示している。

このことから、先述のアルコール関連問題対策推進基本計画の述べている未成年への飲酒予防や飲酒に伴うリスクに関する知識の普及に、本ツールが活用できないかと考える。そこで本研究では、大学生を対象に本ツールを使用した予防教育がどのような効果をもたらすかについて検討することとする。

また、本研究での対象者は教員養成大学の大学生であることから、学校におけるアルコール関連問題予防教育についてどのように考えるかということについても回答を求め、今後のアルコール関連問題予防教育のあり方についても検討していくこととする。

予防教育ツールの効果の検討法として、可能な限り自由な感想を述べてもらうこと、その結果の分析が恣意的になることを避けるため、予防教育の体験後に自由記述で感想や考えを求め、そのテキストデータからテキストマイニングによる分析を行い検討することとした。

2. 方法

2.1 調査時期と調査対象者

2021年5月～7月にかけて実施した。教員養成大学の1年～3年生50名を対象に実施し、実施後の自由記述アンケートについては合計49名から回答が得られた。その中で、研究協力に同意した45名(男性11名、女性34名)を分析対象とした。

2.2 調査方法

筆者が担当する心理学に関する授業において、アディクションに関する講義の導入を行った後に、4～7名のグループに分かれて「アル・コル・かるた」を実施した。

なお、アディクションに関する講義では、アディクションの定義や、日本におけるアディクションの現状について講義の導入として説明した。

「アル・コル・かるた」は、グループから1名を選び、その1名が読み札を読む役割(読み手)とした。読み手が読み札を読み上げ、かるたをとった参加者は、絵札の裏に記載されている解説文をグループの他の参加者に読んで、伝えるという方法で行った。かるたの残数が半分程度になったところで、読み手を別の参加者と交代するよう指示した。

なお、解説を見ても理解できなかった点があれば、メモをとっておくようあらかじめ伝えておき、「アル・コル・かるた」終了後に、質問時間を設け、出された質問に関して筆者が全員に解説を行った。その後、Google formsを用いて、アンケートへの回答を求めた。

また、実施にあたっては、本調査への協力の有無が成績評価とは関係がないこと、調査協力を強制するものではないこと、個人が特定されないよう配慮する旨を伝えた。

2.3 調査内容

年齢、性別、学年などを尋ねた後に以下の質問を行った。

・アルコール関連問題に関する質問項目

本時前のアルコール関連問題に関する学習歴、アルコールやアルコール関連問題についての知識の有無、家族や身近な人のアルコール関連問題で困った経験の

有無について回答を求めた。

・「アル・コル・かるた」を体験しての感想

「アル・コル・かるたを体験して、どんな体験だったか、感じたことや考えたことを自由に書いてください」と教示し、自由記述を求めた。

・学校におけるアルコール関連問題予防教育について

「アル・コル・かるたの体験もふまえて、学校におけるアルコール関連問題の予防教育をどのように考えるか自由に書いてください」と教示し、自由記述を求めた。

3. 結果

3.1 アルコール関連問題に関する質問項目の回答

アルコール関連問題の学習歴について、「今まで学習をしたことがあるか」について尋ねたところ、「ある」と回答した人が35名（78%）、「ない」と回答した人は10名（22%）であった（Figure 1）。

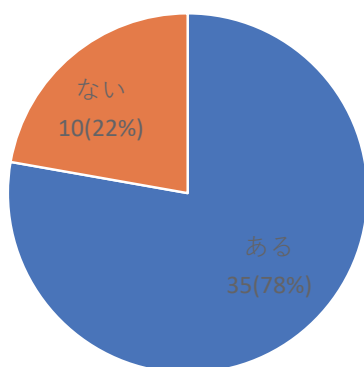


Figure 1 アルコール関連問題の学習歴

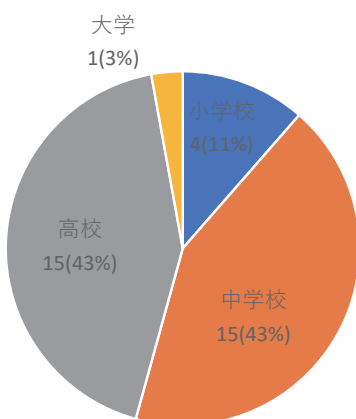


Figure 2 いつ学習したか

「ある」と回答した人の中で、「いつ学習したか」については、中学校15名（43%）、高校が15名（43%）、小学校が4名（11%）、大学が1名（3%）であった（Figure 2）。

アルコール関連問題の全般的知識については「とてもある」「ややある」と回答した人が19名（42%）、「どちらともいえない」と回答した人が21名（47%）、「あまりない」「全くない」と回答した人が5名（11%）であった（Figure 3）。

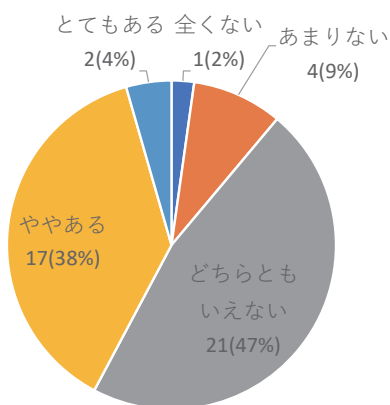


Figure 3 アルコール関連問題全体の知識

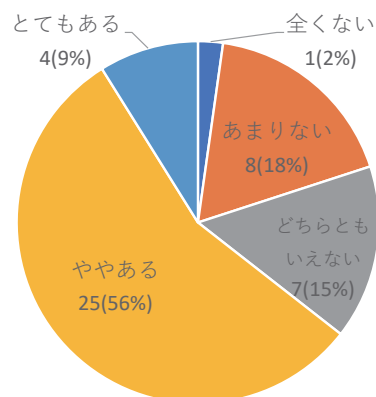


Figure 4 アルコール依存症の病気の特性の知識

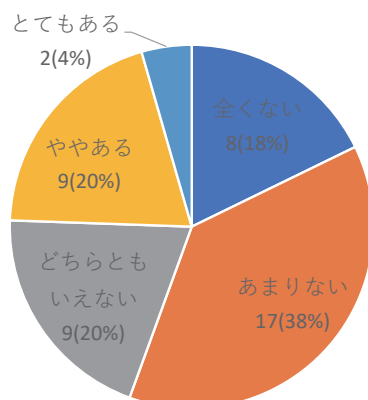


Figure 5 適切な範囲の飲酒量の知識

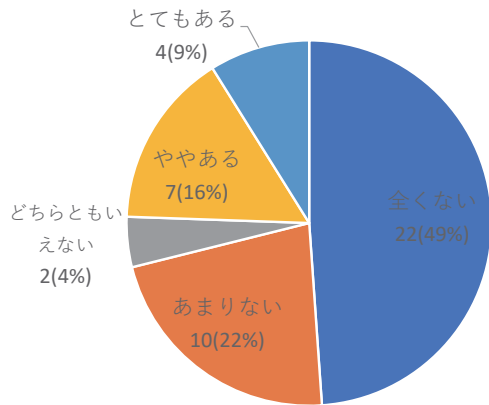


Figure 6 身近な人のアルコール関連問題で困った経験

アルコール依存症の病気の特性に関する知識については、「とてもある」「ややある」と回答した人が29人（65%）に達していた（Figure 4）。しかし、適切な範囲の飲酒量の知識については「とてもある」「ややある」と回答した人が11人（24%）という結果であった（Figure 5）。

家族や身近な人のアルコール関連問題で困った経験については、「とてもある」「ややある」と回答した人

が11人（25%）であった（Figure 6）。

3.2 「アル・コル・かるた」の体験の自由記述

アンケートの自由記述について、樋口（2004, 2014）を参照しつつ、日本語テキスト型データ分析システム KH Coder（3.Beta. 03d）を用いて行った。

・「アル・コル・かるた」の体験

「アル・コル・かるた」を体験し行ってみて感じたことや考えたことについての自由記述内容について、前処理を実行した結果、192の文が確認された。また、総抽出語（分析対象ファイルに含まれる全ての語の延べ数）は6484、異なり語数（何種類の語が含まれていたかを示す数）は964であった。なお、分析に先がけて KH Coder に同梱された茶筌（Chasen）を利用して複合語の検出を行った上で、抽出された複合語のうち、「アルコール依存症」「イネイブラー」「イネイブリング」の3語を分析に使用する語の取捨選択において強制抽出する語に指定した。

その後、自由記述のデータを基に、関連が強い語の共起ネットワークを作成した（Figure 7）。

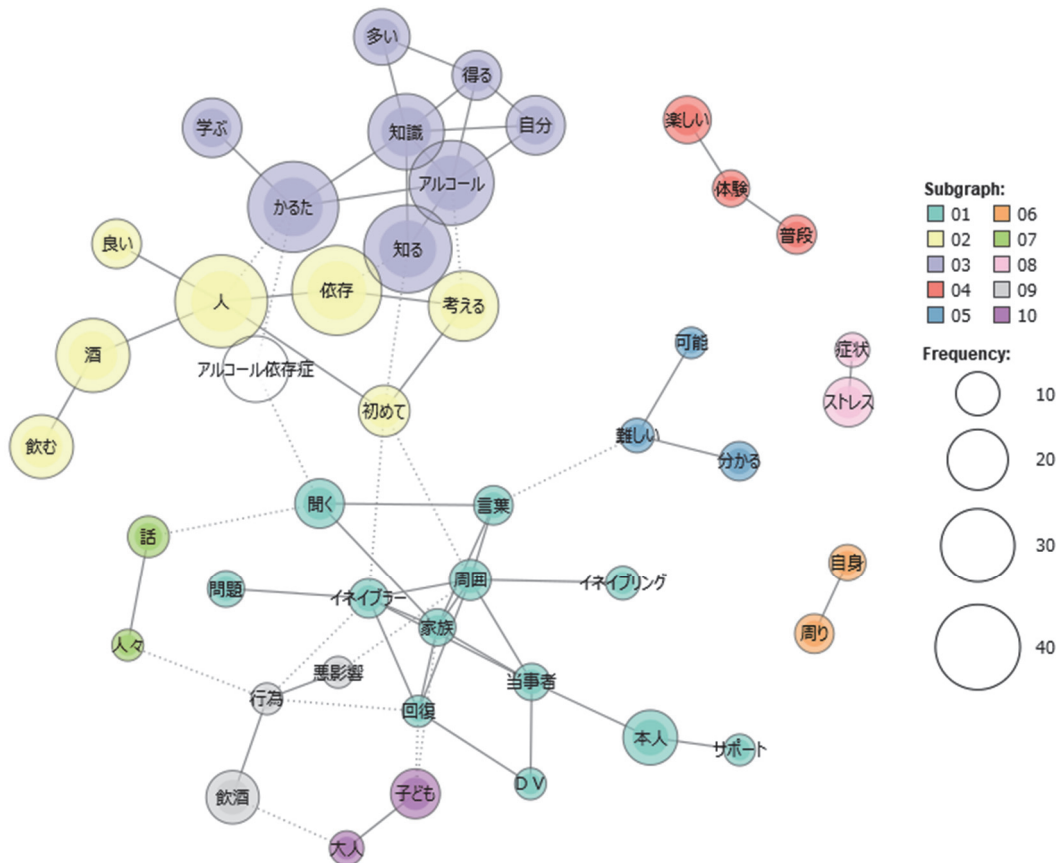


Figure 7 「アル・コル・かるた」を体験して考えたことについての共起ネットワーク

KH Coder の KWIC コンコーダンスにより原文を確認しつつ Figure 7 を概観したところ、記述パターンとして、「かるたを通してアルコールについての知識を知ることができた」(Community : 03)、②「初めて、アルコール依存症や依存をもつ人について考える機会になった」(02)、「イネイブラー、イネイプリングという言葉を知って当事者や家族のサポートの重要性を感じた」(01)、「飲酒の悪影響やそれに伴う行為について学んだ」(09)、「症状と関係するストレスへの日頃からの対処が大事だと思った」(08) といった学びの内容に関する記述の他に、「かるたは子どもから大人まで行えると行った」(10)、「普段のことを振り返りながら体験できる楽しい学習だった」(04) といった学習体験に関する記述や、「自身や周りの人たち (の依存) について考えた」(06) といった自分や周囲の人たちへの振り返りに関する記述がみられた。

・アルコール関連問題予防教育について

学校におけるアルコール関連問題の予防教育について考えたことに関する自由記述内容において、前処理を実行した結果、178の文が確認された。また、総抽出語 (分析対象ファイルに含まれる全ての語の延べ数) は6286、異なり語数 (何種類の語が含まれていたかを示す数) は909であった。自由記述のデータを基に、関連が強い語の共起ネットワークを作成した (Figure 8)。

KH Coder の KWIC コンコーダンスにより原文を確認しつつ Figure 7 を概観したところ、記述内容の典型的なパターンとしては、「学校現場でアルコールや依存について学習、(予防教育の) 実践することは重要」(3)、「早い段階で正しい知識の理解が重要」(8) という依存に関する予防教育の重要性について述べた記述、また「関係依存や薬物依存など身近にある依存について子どもに授業を通じて伝えることが重要」(06) といったアルコールに限らない依存の予防教育の重要性を指摘する記述、「アルコール依存症を学ぶ機会を作

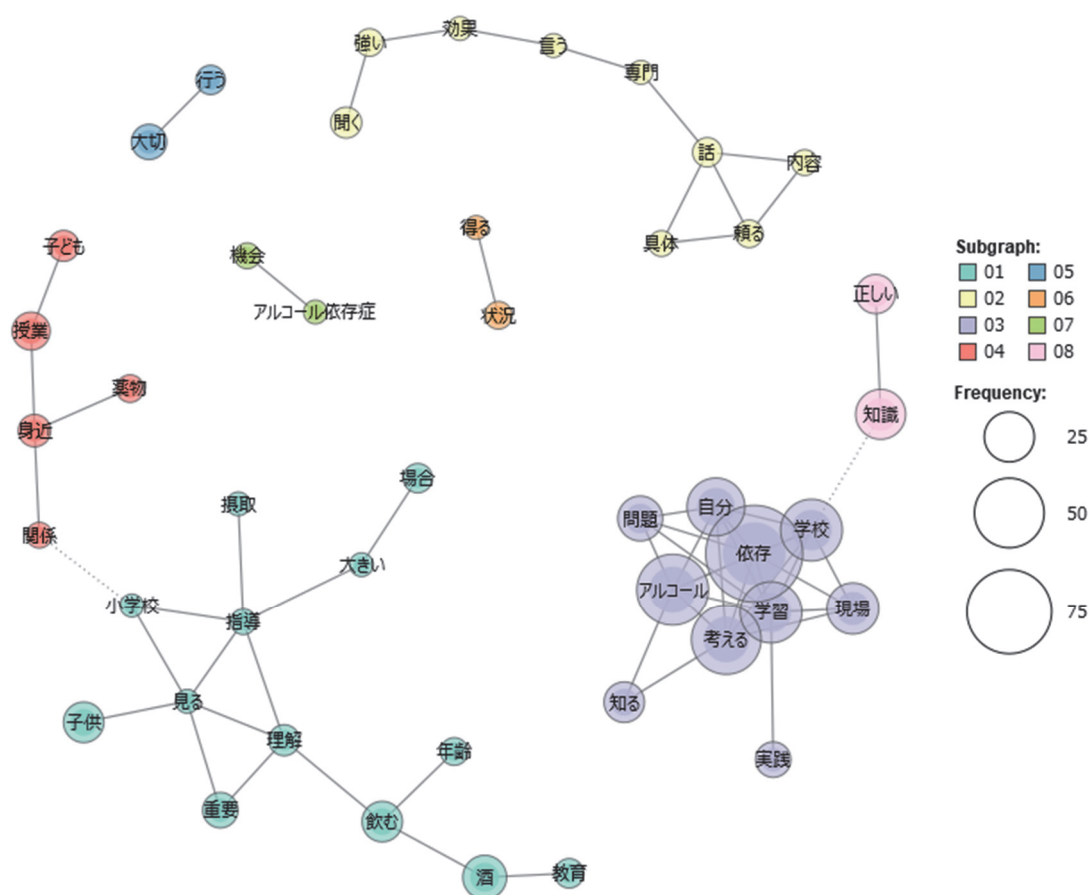


Figure 8 体験を通じて学校における予防教育についての考えに関する共起ネットワーク

ること」(07) や「予防教育を行うことが大切」(05) という記述、「具体的な依存の内容を専門家の話を通じて聞くことが強い効果を生むのではないか」(02) という予防教育のアイデアに関する記述がみられた。

4. 考察

4.1 アルコール関連問題予防教育の時期

「アル・コル・かるた」体験後の自由記述の分析から、全般的にこの体験を好意的に受け止めており、様々な学びを得たとの記述が確認された。また実施時の対象者の様子からは、本ツールやアルコール関連問題予防教育への抵抗感はほとんど感じられなかった。

これについてはいくつかの要因が考えられる。一つは、かるたを通じた学びによって、アルコール関連問題の学習に関する抵抗性を少なくできた可能性があげられる。また、本研究の対象者の多くが、飲酒経験が少ない、あるいはないために、抵抗なく受け入れられた可能性もあろう。さらに、本研究の実施時期が、新型コロナウイルスが感染拡大しているコロナ禍ということも、対象者の飲酒機会が減っていることに関係する可能性もあるだろう。

現在、社会においてアルコール関連問題の中核群と推定されている世代は50～60代である（石巻市民健康調査, 2014）。若年者、また飲酒経験の少なさがアルコール関連問題への抵抗感に関連するとするならば、予防教育に早期に取り組むことは、抵抗感が少なく、正しい知識と理解について予防教育をすすめることができるのではないかと示唆される。

4.2 アルコール関連問題予防教育の内容

単純集計の結果において、アルコール関連問題予防教育の学習歴は78%に及んでいることが分かった。学校教育の中でアルコール関連問題予防教育が行われていることが改めて確認できたといえる。しかしながら、その予防教育の中で主に学んでいる知識は、アルコール関連問題の恐さについての学習が中心であった可能性がある。単純集計結果によれば、アルコール依存症の病気の特性などの知識は多いものの、適性範囲の飲酒量の知識についてはほとんど知らないというアンバランスな結果が見られた。つまり、飲み過ぎると怖い病気になるということはわかっている、どの程

度飲めばそうになってしまうのか、どの程度であれば適性範囲なのかというお酒との上手な付き合い方については教えていない可能性がある。

繰り返しではあるが、飲酒は身近なものであり、求めれば容易に購入することができる社会に我々は生きている。年齢を重ねれば、飲酒をする機会、飲酒に誘われる機会、飲酒行動を促す可能性がある刺激が身近にちりばめられている社会である。いかにその現実の中で、正しい知識とリスク管理をしながら、どのように生きるかについての教育が必要であり、予防教育を実施するにあたっては、実施者はこのバランスについて常なる点検が必要となる。

4.3 学校における「アル・コル・かるた」の活用

しばしば学校で行われる予防教育は、アルコール関連問題予防教室をはじめ、薬物乱用防止教室、スマートフォンやインターネットの安全教室など、講話を聞くといった形式が多い現状がある。結果として、一方的にアルコール関連問題の知識について受動的に聴き続けるという形にならざるを得ない。その点、「アル・コル・かるた」はクラス単位で、体験を通じた能動的な学習として取り組める予防教育ツールとして活用できるのではないだろうか。

また、「アル・コル・かるた」は、「適正飲酒10カ条」「アルコール健康障害対策基本法」「多量飲酒」「アルコール依存症」についての4カテゴリーに分類できるように制作されている。学校は多忙さを極めており、実施時間の都合もあるだろう。本ツールは、一部のカテゴリーのみの実施や、4カテゴリーから特に大事だと思われる札で構成される短縮版での実施も可能であり、短時間での実施も可能となっている。自由記述には、「知っていたこともあったが、知らなかったことも多く広く学べた」とアルコール関連問題の知識を広く学ぶことができるとともに、「アルコールや依存症の人だけでなく、その家族という視点を学ぶことができた」との記述にあるようにアルコール関連問題を具体的に身近に想像しやすくなるという可能性もある。

本研究の対象者からは、「アル・コル・かるた」を再び使用して学びを深めたいという感想や、楽しみながら学べたことが良かったとの反応が多くみられた。自ら学びを深めていくことができるという学びの方法としても有効なツールであると考えられる。

4.4 アルコール関連問題予防教育と気づき

尾崎（2016）によれば、アルコール依存症の生涯経験者数は男性の1.9%（94万人）、女性の0.2%（13万人）、男女合わせて推計107万人とされている。また、生活習慣病のリスクを高めるとされる危険な飲酒習慣を持つ人は男性の14.4%（726万人）、女性の5.6%（310万人）、男女合わせて全人口の9.6%（1036万人）と推計されている。

本ツールの体験を通じて、対象者自身が「自分は依存的な傾向があるかもしれない」という気づきや、「私の祖父は依存症かもしれない」（父親や母親、叔父などの依存症傾向に気づいたとの記述も見られた）といった身近な人の依存に気づいたといった感想が見られた。本ツールでの学びが、体験者の内省や気づきを促していると考えられる。さらに、単純集計では「今まで自身や自身の周囲のアルコール関連問題で困ったことがあるか」という質問に対して、あてはまると回答した人は11人（26%）にのぼっていた。

この結果からも、アルコール関連問題が私達の身近な問題であることがわかる。しかしながら、身近な人のアルコール関連問題は気づかれにくく、気づいたとしても周囲に相談しづらい問題でもある。アルコール関連問題の予防教育を通じて、気づき、そして相談しづらい悩みを語れる場や支援体制の整備の重要性が改めて示唆された。

5. 今後の課題

本研究では、「アル・コル・かるた」を実践し、その体験に関して自由記述をもとにテキストマイニングを用いて質的分析を行った。今後は、本ツールを用いて、小学生や中学生、高校生を対象にした実践の検証も必要となろう。その際には年齢や発達段階に応じた本ツールの改訂も必要になるだろう。

また、アルコール関連問題予防教育を行うことになる教職員自身が体験するという必要ではないかと考える。教職員自身が、アルコール関連問題についてどのように捉えているのかによって、予防教育がどのように児童生徒に伝えられていくのか異なることになるだろう。

以上のように、さらに本ツールを用いた実践を積み重

ね、その効果を検討していくことが今後の課題である。

謝辞

東日本大震災で亡くなられた方々に対し、心から哀悼の意を捧げますとともに被災された多くの方々にお見舞い申し上げます。また本研究にご協力いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

文献

- 樋口耕一（2004）テキスト型データの計量的分析 - 2つのアプローチの峻別と統合 - . 理論と方法, Vol.19 (1), 101-115.
- 樋口耕一（2014）社会調査のための計量テキスト分析 - 内容分析の継承と発展を目指して - . ナカニシヤ出版.
- 樋口広思・渋谷浩太（2020）学校におけるアルコール関連問題の予防教育に関する考察 - 東日本大震災での支援の経験から - . 宮城教育大学紀要, 55, 257-266.
- 石巻市（2014）石巻市健康増進計画改訂版「みんなで生き生き健康プラン」. 石巻市健康部健康推進課.
- 厚生労働省（2021）アルコール健康障害対策推進基本計画 https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/keikaku_1.pdf (2021.09.01アクセス)
- 尾崎米厚（2016）アルコールの疫学 - わが国の飲酒行動の実態とアルコール関連問題による社会的損失. 別冊 医学のあゆみ アルコール医学・医療の最前線 UPDATE, 43-47.
- 渋谷浩太（2016）アルコール関連障害を学ぶために開発した「アル・コル・かるた」の実践とその効果. 日精診ジャーナル, 42 (5), 6-12.
- 上野易弘（1997）孤独死、自殺、労災死などの震災関連死の実態. 神戸大学震災研究会「苦闘の被災生活」所収, 神戸新聞 総合出版センター.

（令和3年9月30日受理）

Examination of alcohol-related problem prevention education tools in schools

-Analysis of free description by text mining-

HIGUCHI Hiroshi and SHIBUYA Kouta

Abstract

In recent years, preventive education for alcohol-related problems for minors has become a major issue. In tackling this issue, the efforts of schools to which many minors belong play a major role in preventing alcohol-related problems.

The purpose of this study was to examine what kind of effect "Alcohol Karuta", which is a preventive education tool for alcohol-related problems, was created from the experience of supporting the Great East Japan Earthquake in schools. We conducted "Alcohol Karuta" and conducted a qualitative analysis by text mining from the free-form answers.

As a result, it was suggested that it is important to carry out preventive education on alcohol-related problems at an early stage. In addition, it was thought that the learning content of alcohol-related problems should not only convey the fear of addiction, but also how to deal with drinking behavior. Furthermore, it was speculated that alcohol-related problems were familiar to university students, and the need for support was confirmed.

Key words : Alcohol related problems, Preventive Education, Text mining, Alcohol Karuta,
The Great East Japan Earthquake